

相談過程における能所の轉換について

藤 田 清

相談佛教の意義 相談佛教というのは、佛教を一つの相談體系と見るものである。今日世間に行われるカウンセリングとはちがった見地に立つ別箇の體系であるというべきものである。それはまた相談と佛教とは別のものでなく、眞の相談は佛教に歸一し、佛教もまたおのずから相談となるということを意味している。

そのためにはいわゆるカウンセリングの批判の上に、その佛教としてのあり方を明確にしてゆかねばならないであろう。

能所縁起觀 相談佛教が佛教であることの證左は、それが縁起觀に立ち縁起觀の展開として成立するところにあるといえよう。わたくしたちは特に能所縁起をもつて縁起觀の根本的なものと考ええる。その理由としてはそれが原始經典において明瞭にされており、大乘佛教の展開がそれを根本としており、また相談活動ともつともよく對應しているからである。佛教がなぜ説法をせねばならぬか、またその説法が應機説

法となり、究極的には相談活動に歸着せねばならぬかということ、能所縁起觀に立つて明瞭にし、また原始經典の上に釋尊の相談實踐のあとをたどるということも極めて必要なことであるが、今はこれに觸れる暇がない。ここではわたくしたちの相談活動實踐の理論的根據を明確にすることを主眼として、すこしく考察を試みることにしよう。

緣起的相談態度 相談活動は普通一人對一人の話合いとなる。その場合教化活動にあつては一人は説法者であり、一人は聞法者であると考えられよう。ただ今日の説教的ないし講演的、講義的説法觀によつて律せられることは誤解のもとであるから、必ずしも適當とはいえないかも知れないが、しばらく説法者をカウンセラー、聞法者をクライエントと呼んで、舊來の説法のあり方との差を明確にしておきたい。

この場合能所縁起觀に照らして、このカウンセラーとクライエントとの關係を考えるとどうなるであろうか。それはカウンセラーがあるが故にクライエントあり、クライエントある

が故にカウンセセラーあり、カウンセラーなければクライエントなく、クライエントなければカウンセラーなし、というように相依相成として考えられる。もとより何れを能、何れを所と定めることのできない関係のものである。しかし先にも一言したように、ここでは相談活動實踐の立場を主とするから、その見地に立つて假にカウンセセラーを能取、クライエントを所取と考えてゆきたいと思う。

世間一般の考え方はこれと異なる。能所は縁起ではなくして對存である。したがつてカウンセセラーとクライエントとの關係も對存としてとらえられる。そのあり方は次の三類に要約せられる。一つはカウンセセラーを中心と考えるあり方である。この考え方はカウンセセラーが先にあり、それにともなつてクライエントがあるという考え方に通じるものであつて、能取先住論といわれるべきものである。これと對蹠的なものは、クライエントを中心と考えるあり方である。それはクライエントを先にたてる考え方に通じ、所取先住論にあてることができよう。この二つのあり方は、現實的には今のカウンセリング學界を二分する對立的な學說として、前者は指示的方法となり、後者は非指示的方法となつてゐる。カウンセセラーが主となれば指示的になり、クライエントが主となれば非指示的となることは、説明を要しないことであらう。この二つに對して折中派が生じる。それを相應論として考えること

ができよう。これもまた有力な今日のカウンセリング學派の一つである。カウンセリングの學派は、その外にも新行動派とか精神分析派等種々のものを數えることができるが、根本的にはこの三類のあり方の何れかに所屬せしめることができるかと思う。

ところでこの三類のあり方を、能所縁起觀によつて批判するとどうなるであらうか。カウンセラーとクライエントとは相依相成のものであるから、本來的には能所も固定的に考えられるべきでなく、何れを先、何れを後ということは成立しない。同時に成立し、また同時に解消する。能取先住論も所取先住論も能所縁起觀からは成立しないのである。従つてカウンセラー中心の指示的方法も、クライエント中心の非指示的方法も、佛教的には成立しない、その成立を認めるものは佛教的ではない、といわねばならない。それでは相應論にあたる折中派はどうであらうか。カウンセラー中心もクライエント中心も認められないのであるから、兩者の折中もまた認められない。また始めからカウンセラーとクライエントとを認めるものは、關係づけによつて始めてカウンセラーでありクライエントであるべきものを、關係づけ以前に規定してかかるものである。それはないものがありと考えるものであり、正しいあり方としては成立しない。また關係づけによつてカウンセラーとなりクライエントとなつて後に、改めてま

たカウンセラーとクライアントとの關係づけをいうことは無意義であるということになる。

以上のように考えて來ると、能所縁起觀に立つとき、いわゆる科學的カウンセリングはその根本において否定せられるのである。このことは能所縁起觀の當然的な結論であつて、單に佛教といわゆるカウンセリングとを結びつける佛教カウンセリングや、ひろく佛教の科學的解釋などの成立しがたい理由を明確にするものである。それはまた科學時代に、それを批判するあり方としての佛教の存在意義を確立せしめるであらう。

相談過程における能所の寂滅と轉換 カウンセラー中心でもなく、クライアント中心でもなく、折中でもないカウンセリング、相談佛教とはいかなるカウンセリングなのであろうか。單なる理論體系ではなく、本來實踐體系であるべき相談佛教としては、その實踐道を明確にしなくてはならないであらう。しかもそれが佛教そのものであるためには、能所縁起觀の必然的展開でなくてはならないのである。

わたくしたちは、常に外なる客體を所取とし、それをとることによつて、とる能取があると考ええる。そういうあり方が習慣となつてしまつてゐる。それが能所對存觀なのである。ところが、能所縁起觀は、こうした能所、主客の對立は根本的なあり方ではないと見る。したがつてこの誤れる能所觀の

否定、能所寂滅がすなわち佛道のあり方をなすのである。またこのことがそのまま相談佛教のあり方なのである。相談活動の場においてカウンセラーを能とし、クライアントを所とするとき、普通は、カウンセラーなるわたくしが、クライアントなるあなたに對して、あなたはクライアントであり、あなたをクライアントと認めるわたくしはカウンセラーである、このようにカウンセラーとクライアント、自と他とを分別してかかる。しかし正しい相談佛教のあり方では、この自他の分別が否定されるのである。カウンセラーとクライアントとをへだてる心の仕切が取れるといつてもよい。この能所の寂滅が相談佛教實踐の第一條件といふべきものである。

この能所が寂滅し、カウンセラーとクライアントとの間の心の仕切がとれると、同時に丁度堰が切れると水が流れ出すと同じように、心が流れ出すのである。相談活動の場では、クライアントの心がカウンセラーの心の中に流れこむのである。この場合カウンセラーの心は能所の分別を否定した空である。釋尊のことばのように「わたくしはこのことを説くということがない」（スッタニパータ）のである。クライアントの心が流れこんで來るにつれて、カウンセラーの心はクライアントの悩みを自らの悩みとするようになる。維摩經にいわゆる「衆生が病むから自分も病む」のである。自分の悩みというものはないが、クライアントの悩みが悩みとなるの

である。そこにおいては、おのずから相手の立場に立つ應機説法とならざるを得ない。

カウンセラーは、今やクライエントの問題が、その苦惱が、カウンセラー自身の問題となり、苦惱となるにいたつたのである。その場合にも、カウンセラーはその問題と對立的に關係してゆくのではない。その問題、その苦惱を能所縁的に批判し、その苦惱の根本を寂滅してゆくのである。それとともにクライエントの問題が解決し、苦惱が解消するに至るのである。この場合、カウンセラーとクライエントとの間には仕切がないから、本來的には解決もまた同時と考えられる。

カウンセラーとクライエントとの間の仕切がとれることを能所寂滅といい、その間に心が通い出すことを能所の轉換というと考えることができよう。既に明らかにしたように能所は本來固定したものではないから、能所は相互に轉換しつつその相談を深めてゆくのである。この場合、能所の寂滅は能所の空無化ではなく、能所の執着のない能所となるともいえる。その能所は常に能所の寂滅に裏付けられているのであつて、もとより轉換が固定してはならない。

以上が相談佛教の方法の大綱ともいふべきものである。それを更に具體化してゆくところに、唯識^⑩の障と智、あるいは轉識得智の説も、相談佛教體系として取上げられるに至るのであるが、今はすべて省略する。

この相談方法としての能所寂滅と能所轉換とを合せて否定的啓發法と名付けることができよう。寂滅を否定とし、轉換を啓發とする。しかも兩者が別箇のものでないことをあらわして一語にまとめたものが、否定（的）啓發（法）なのである。相談過程において、問題の根本であり、苦惱の根源である能所對存的あり方が縁起の道理に照らされ、あるがごとくにあらしめられてゆくこと、これが否定的啓發なのである。

なおこの能所寂滅と能所轉換とのあり方を具體的に示すものとして、道元禪師の「正法眼藏生死ノ卷」の一節をあげて考えてみたい。

ただわが身をも心をも、はなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちらをも入れず、ころをも、つひやさずして、生死をはなれ佛となる。たれの人かころにとどこほるべき。

この場合「正法眼藏佛性ノ卷」の「悉有は佛性なり」という見方をとれば、「佛のいへになげいれて」は「クライエントに投げ入れて」すなわち「能所寂滅」であり、「佛のかたよりおこなわれて」は「クライエントの方より行われて」すなわち「能所轉換」であり、「これにしたがひもてゆくとき、ちからをも入れず、ころをもつひやさずして、生死をはなれ佛となる」は、能所轉換の深化過程をあらわすものと考えることができよう。

なおカウンセラーが、いかにしてクライエントとの間の心の仕切をとるか、^①その具體的實踐方法についても、この能所縁起觀の展開において更に實踐的に究明せられねばならないであろう。今は一般的にそれを考えてゆくことにする。何よりも大切なことは、クライエントの可能性（佛性）を確信するということである。次にはその確信の上に立つて何等の成心なく虚心にクライエントの言葉、その表現せんとするところに耳傾けることである。そのためには精神をクライエントの上に集中し、それを仔細に觀察することがなされねばならぬ。最後にそれによつて生れた效果、たとえば解決も、それはカウンセラーの力によるものではなく、クライエント自身の主體的立場での解決であるとして、クライエントの方へめぐらし向わさねばならないのである。

- 1 印度學佛教學研究十二の一「佛敎のカウンセリングの性格について」（藤田清）「佛敎カウンセリング」（同人）参照
- 2 印度學佛教學研究十三の一「緣起成道說資料」（平野眞完）には九支十支緣起說における識と名色との關係において能所が説かれている。なお「釋尊」（舟橋一哉）に譯載する阿含經には、「比丘等よ、一切とは何であるか。見るものと見られるものと、聞くものと聞かれるものと、嗅ぐものと嗅がれるものと、味うものと味われるものと、觸れるものと觸れられるものと、思うものと思われるものと、これらが一切である。」とある。
- 3 山口益博士の諸著、殊に「大乘としての淨土」参照。

- 4 相談活動は、一人對一人の話し合いであり、誰にもそれが能所關係であることは明確である。
- 5 「佛敎學序說」（山口益等）中の「大乘の佛道體系」、「佛敎カウンセリング」（藤田清）参照。
- 6 「佛敎カウンセリング」の「釋尊の相談例とその展開」参照。
- 7 「此れがあるとき、彼れがある。此れが起るときに彼れが起る。此れがないときに彼れがなく、此れが減るとき彼れが減する」（緣起の型といわれるもの）による。
- 8 「空の世界」（山口益）般若波羅密・無二智参照。
- 9 「相談心理學」（澤田慶輔編）第二、第三、第四章参照。
- 10 カウンセラーの間でも近時は、いわゆるカウンセラー中心説やクライエント中心説は次第に反省せられて來ているようであるが、相應論的な見方についての検討はまだ餘りないようである。この見方が一見客觀的な正しいあり方のように感じられるからであるが、しかし能所の本當のあり方ではない。この點に關しては、「心清淨の道」（山口益）参照。
- 11 「アポロン佛」（山口益）第九章参照。
- 12 「動佛と靜佛」（山口益）第六章参照。
- 13 科學と佛敎との關係は、障と智の關係において明瞭となる。具體的實踐については、これを人間精神の構造に即して考えた唯識の立場が、一層直接的であり、そのまま實踐の指標となるように思う。しかしここでは主として中觀の立場から考察した。それはそれで一つの整然たるカウンセリング體系である。
- 14